九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

日本語の「ヲ格+移動動詞」構文と対応する中国語表現

姚, 艶玲
九州大学大学院比較社会文化学府

https://doi.org/10.15017/4494574

出版情報：比較社会文化研究. 15, pp.129-139, 2004-02-28. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：

『比較社会文化研究』第15号（2004）129～139頁
Social and Cultural Studies
No.15（2004），pp. 129～139

日本語の「ヲ格＋移動動詞」構文と対応する中国語表現

姚（ヨウ）　艶玲（エン レイ）

1. はじめに

日本語における動詞の下位分類としての＜自動詞＞と＜他動詞＞の区別が明瞭ではないということがよく指摘されている。その具体的な現われの一つに移動動詞がヲ格をとるということが挙げられる。例えば、「歩道を歩く」「空を飛ぶ」などである。このような「ヲ格」を伴う移動動詞の用法は、また日本語学習者の自動詞・他動詞を習得する時の難点の一つにもなっている。中国語話者の日本語学習者に日本語の自動詞・他動詞の何が難しいのかと尋ねたら、一位は「（他動詞だけでなく）自動詞でも『を格』を取るものがあって間違えやすい」というコメントが挙げられている(岡崎智己・張　建華(1998：32)による)。コメントに添えた例には、例えば、「空を飛ぶ」「電車を降りる」「日本を発つ」「学校を休む」などのようなものがある。

移動動詞の「ヲ格」を伴う用法の習得の難しさは学習者の誤用例からも窺える。

(1)一階と六階の間**に(→を)**上ったり下りたりしました。（中国語母語話者の作文から）

(2)私たちは街燈の下**で(→を)**歩いて、寮に帰りました。（中国語母語話者の作文から）

本稿はこのような「ヲ格＋移動動詞」をめぐって、当構文の成立条件を考察した小論(2003)の内容を踏まえて、日本語の「ヲ格＋移動動詞」に対して、中国語の移動動詞表現はどのように対応しているのかを実際の用例を用い考察し、「移動」という事柄をめぐっての両言語の表現形式の相違と、相違をもたらす要因を明らかにしたいと思う。これによって、習得難点である「ヲ格＋移動動詞」の指導に生かすための文法記述の説明を提示したいと考える。

2. 先行研究と問題点

2.1 日本語の「ヲ格＋移動動詞」についての先行研究

ヲ格名詞句を伴う移動動詞の問題を取り上げた論考はその問題処理の考え方によって，大きく以下のように分けられると思う。

(Ⅰ)二項対立的な観点から、「ヲ格＋移動動詞」を自動詞の用法であるとする見方

代表的な論考には奥津(1967)がある。奥津(1967)では、動詞の自・他は、文構成の上で、自動詞は目的語をとらず、他動詞は目的語をとり、名詞につく格助詞の「ヲ」が、目的語の目印となるとした上で、どの格助詞の「ヲ」を目的語とみとめるかについて論じた。

(3)弁慶は安宅の関を通った。

奥津は(3)のような例における移動の行為が行われる場所を示す「ヲ格」は目的語とは異なった文法機能を持つと認めてよいものとし、「目的格」ではなくて、「移動格」を示す助詞というべきであろうと論じている。自他の対応がある場合、自動詞のとる主語が、他動詞のとる目的語と一致するという構文論的な方法によって、移動動詞はヲ格をとっているにもかかわらず、自動詞の用法であると主張している。

このような観点をとった論考は奥津(1967)のほかには、須賀(1981)、福島(1988)などがある。須賀(1981)では、「口をあける」「口をあく」のような形式、すなわち対応する他動詞を持つ自動詞が目的語を伴っている形式の持つ意味について論じたものである。論考では「太郎が横町を右へまがる」や「子どもが横断歩道をわたる」のような対応する他動詞を持つ自動詞がヲ格を伴う例については、奥津(1967)の論点に従い、「まがる」「わたる」などの自動詞は、いずれも移動の意味を持つものであり、そのヲ格も移動の行為が行われる場所を示している、所謂「移動格」であるとしている。

一方、福島(1988)では、「太郎が病室を移る」と「太郎が病室を移す」の例について、前者は「具体的に存在する場所」を指し示し、後者は“太郎が療養するところ”というような「抽象的な資格をいう」もので、両方はそれぞれ典型的な自動詞文と他動詞文であると論じている。

(Ⅱ)プロトタイプ論の観点から、「ヲ格＋移動動詞」を他動性の意味特徴を持つ他動詞的自動詞の用法であるとする見方

代表的な論考には池上(1993)がある。池上(1993)は言語類型論の立場から認知文法的手法によって、「ヲ格＋移動動詞」の意味を考察し、日本語における＜移動＞と＜行為＞という概念は絶対的な対立要因としては機能してい

ないと指摘し、ドイツ語や英語と対照的に、日本語では、二つの概念は相互に近似化されうる程近い関係に受けとられる傾向があるとしている。池上(1993)と同じく、他動性との関連で「ヲ格＋移動動詞」をとらえた論考にはまたウェスリー・M・ヤコブセン(1989：172-3)や山梨(1995：242-4)、朴(1998)、黒田(2000)などがある。

ヤコブセン(1989)では、「廊下を走る」と「川を泳ぐ」のような一部の「ヲ格」を伴う移動動詞の例を取り上げ、他動性の意味原型からどれほど離れているのかを調べた中で、意図的行為を表す点と場所を「全面的に」移動するという点から、他動性の意味原型とつながっているとしている。

山梨(1995)では、

(4) a．鈴木さんが東京から去った。

　　b．鈴木さんが東京を去った。

のような例の対照によって、「ヲ格」を伴う移動性自動詞構文の他動性を考察し、「ヲ格」が使われる場合には、主体がこれによってマークされる対象に、能動的に働きかける傾向が強く感じられることから、「ヲ格」を伴う構文の方が他動性が相対的に高くなると説明している。

朴(1998)は、「ヲ格」をとる移動動詞構文を他動詞か自動詞か、はっきり二分するものではなく、他動性の度合いの問題として取り扱い、移動動詞構文に表れる日本語の「を」格と韓国語の「을(ul)」格について他動性という概念を用いて、その意味機能を考察したものである。

黒田(2000)は、認知言語学の立場から、移動動詞と共起し得るヲ格名詞句の意味特性を説明した上で、[X ガ Y ヲ動詞]という構文で共に言語化される<移動>と<行為>におけるヲ格名詞句の連続性とその要件を見出そうとするものである。

以上、(Ⅱ)の先行研究にみられるように、「ヲ格＋移動動詞」現象を他動詞と対立するものとして捉えるのではなく、設定した他動性の原型のパラメータと共通点を有していることから、典型的な自、他動詞間の連続体として、把握すべきだというプロトタイプ論の捉え方は言語現象の実態に則し、「ヲ格＋移動動詞」用法の解釈に有効なアプローチであると思われる。ただ、(Ⅱ)にみられたいずれの先行研究も他動性という概念でもって、「ヲ格＋移動動詞」構造の意味を考察すべきだということを指摘したものの、具体的にはどういう点において、典型的な他動詞構文と共通する文法的特徴を持っているのかについては触れられていない。

したがって、本稿では(Ⅱ)の立場をとって、より多くの実例を用い、「ヲ格＋移動動詞」構文の他動性的な現れを詳しく見ていきたいと思う。そして考察の過程で、その他動性的な特徴は対応する中国語の移動動詞表現との比較対照によって、さらに浮かび上がらせたいと思う。

2.2 中国語と日本語の移動動詞の比較対照を取り上げた先行研究

中国語では格が存在せず、形態論的な格の区別をしないため、格助詞を介した空間名詞と移動動詞の構造との対照は難しいのだろうか、この問題を取り上げた先行研究はそれほど多くはない。

代表的なものには方(2002)、平井・成戸(1996)などがある。方(2002)は、連語論の立場から、「移動動詞」と「空間名詞」との関係について、日本語の「N 格＋V」構造と中国語の“V＋N”構造との結びつき方の相違を中心に考察したものである。中国語の動賓構造における“移動動詞＋空間名詞”の組み合わせがより限定的な下位のカテゴリカルな意味を要求することや、また日本語の「N＋V」と中国語の“V＋N”の文法的な意味が同一でない場合があるということなどが論じられている。

平井・成戸(1996)では、経過点を表す中国語の「従・トコロ」と日本語の「トコロ・ヲ」との比較をしながら、日中両言語それぞれにおける、経過点を表す表現と起点を表す表現との境界について考察をしたものである。日本語では、経過点は「ヲ」によって示される場合、トコロは動作の客体としての性格を帯びるのに対し、中国語では、「従・トコロ」が述語の連用修飾成分であり、トコロが動作の働きかけを受ける客体としての性格を帯びることがないと指摘している。

以上の論考のほかに、荒川(1984、1996)などもある。いずれの論考においても、移動動詞の語彙的な側面か或いは移動動作の行われる空間・場所を示す成分である「ヲ」や「カラ」格、及び「従」や「在」など介詞の使用条件の相違に焦点を当てたもので、「ヲ格＋移動動詞」と中国語における対応形式との異同については注目されていない。

3. 日本語の「ヲ格＋移動動詞」構文の他動性についての考察

3.1 ヲ格をとる移動動詞とその類型

ヲ格をとる移動動詞として以下のようなものを取り上げる。

歩く，走る，泳ぐ，飛ぶ，辿る，伝う，行く，来る，戻る，のぼる，上がる，下る，回る，曲がる，進む，向く，流れる，出る，発つ，去る，離れる，降りる，外れる，立つ，移る，渡る，通る，越える，抜ける，経る，過ぎる，横切る，計 32 個である。

この 32 個の動詞を以下に示すような三つのタイプに分類した。

(ⅰ)移り動く動作を表わす動詞：

例：歩く，走る，泳ぐ，飛ぶ，辿る，伝う，行く，来る，戻る，のぼる，上がる，下る，回る，曲がる，進む，向く，流れる等

(ⅱ)離れる動作を表わす動詞：

例：出る，発つ，去る，離れる，降りる，外れる，立つ等

(ⅲ)通り抜ける動作を表わす動詞：

例：渡る，通る，越える，抜ける，経る，過ぎる，横切る等

さらに、(ⅰ)に関しては、方向性という観点から捉えられるものとして、「行く，来る，戻る，のぼる，上がる，下る，回る，曲がる，進む，向く，流れる」と、様態という観点から捉えられるものとして、「歩く，走る，泳ぐ，飛ぶ，辿る，伝う」という二つの下位のカテゴリーに分けられる[1)]。

3.2 「ヲ格＋移動動詞」構文の他動性について

2.1 で触れたように、「ヲ格」を伴う移動動詞は他動性原型と共通した意味要素を持つ動詞であることがわかる。つまり、ヲ格名詞句で示される目的語を伴う他動詞と共通している場合があるということである。この点に関しては、奥田(1983)と寺村(1982)では次のように述べられている。

奥田(1983：143-4)では、ヲ格名詞句と動詞との結びつきは単に空間的であるばかりでなく対象的でもあり、ヲ格の名詞が示す場所は動作が成り立つために必要な対象でもあるとしている。

寺村(1982：103、110、112)では、「(ドコ)ヲ出る、降りる、離れる」や「(ドコ)ヲ通る、走る、経る」などのようなヲ格名詞句はいわゆる必須補語もしくは準必須の補語であり、運動全体を包む空間の範囲を表すデ格と異なって、それが欠ければ不完全な叙述となるとし、特に場所の補語のうち、通りみちの「～ヲ」に一番動作の「対象」的性格があると指摘している。

奥田、寺村いずれの考え方によっても、空間・場所を表すヲ格名詞句は動詞が表す出来事を直接的に成立させる成分であるということになる。ヲ格により示される成分が出来事を直接的に成立させるものであるという点においては、ヲ格の名詞句がいわゆる他動詞と組み合わされ、動作の客体を表す場合と共通している。

小論(2003：69-70)においても、認知言語学的観点から、「ヲ格＋移動動詞」における事態を＜状況レベル＞―＜認知レベル＞―＜言語化レベル＞という三つのレベルに区別し、状況レベルにおける空間・場所は移動動作が行われるために必要な土台であり、このような事態を主体が認識するとき、それを移動動作が成り立つのに欠かせない関与物としてとらえている。つまり、事態の成立に主体を含めた二つの実体が関わっているのである。関与物は動作の向けられるめあて、動作が及ぼす対象として認知される。この認知の仕方を言語化するときは、つまりヲ格を伴う自動詞構文になるわけである、ということを論じた。

では、他動性の意味特徴を持つ「ヲ格＋移動動詞」構文は統語的な面において、同じ「NP ヲ＋V」というパターンをとる他動詞構文と同じような振る舞いを示しているのだろうか。ここでは、用例によって、両構文に共通する統語的な特徴がみられるかどうかをみていきたいと思う。

(一) 目的語主格化

目的語主格化という現象は、動詞に状態性の助動詞が後接した場合、目的語は「が」でマークすることができるようになるということをさしている(杉本(1986))。例えば、(例文は杉本(1986：292)による)

(5) a. 私はこの本を読みたい。
　　b. 私はこの本が読みたい。
(6) a. 花子はピアノを弾ける。
　　b. 花子はピアノが弾ける。

これと同様に、移動動詞の伴うヲ格名詞句も「を」を「が」にすることができる。

(7)満載排水量七万二千噸の「大和」、「武蔵」は、大きすぎてパナマ運河が通れない。(阿川弘之「山本五十六」)

(8) 僕はその子に追いついて声をかけた。
「坊や、どこへ行くの」
その子はぽかんとした顔で、何も答えなかった。
「ひとりで鉄橋が渡れるかね」
これにも答えなかった。
「じゃ、鉄橋を渡るまで、小父さんが道づれになってあげようか」(井伏鱒二「黒い雨」)

(7)では、もともと「パナマ運河を通る」という形をとっているのであるが、「通る」を可能表現「通れる」にすると、通過する場所としての「パナマ運河を」が「パナマ運河が」になって、主格化される。

(8)はこの現象をさらに明確に表現している。「渡れる」という可能表現に対して、「鉄橋を」が「鉄橋が」になっているのであるが、その次の話では「渡る」というもとの形に戻ったため、「鉄橋」という通過する場所はやはりヲ格でマークされている。

(二) 「の」の前での消去

他動詞文のヲ格は連体格助詞「の」の前には現れないという振る舞い方がある。例えば、(杉本(1986：293-94)による)

(9)　a．韓国語を勉強する
　　b．*韓国語をの勉強
　　c．韓国語の勉強

移動動詞について、以下のような実例をみつけだした。

(10)彼は……北に向って進んでいった。だが、硫黄岳の登りにかかると、そこには前にも増して強風が吹いていた。(新田次郎「孤高の人」)

(11)丘の上りが始まると、僕の息は切れはじめた。(村上春樹「世界の終わりとハードボイルドワンダーランド」)

(10)～(11)に現われている「～の移動動詞名詞形」はそれぞれ以下のような「～を移動動詞」という形に置き換えることができよう。

(12)彼は……北に向って進んでいった。だが、硫黄岳を登るのにかかると、そこには前にも増して強風が吹いていた。

(13)丘を上るのが始まると、僕の息は切れはじめた。

(三)　受身化

あらためて述べるまでもないが、日本語では自動詞も受身形をとっていわゆる間接受身(迷惑受身)をつくり、多くは主体がなんらかの被害・迷惑を被ることが表わされる。ここでは「ヲ格＋移動動詞」の直接受身の可否について見てみたいのだが、移動動詞の伴うヲ格名詞句の受身化の可能性は従来しばしば取り上げられてきている。杉本(1986)では、「移動補語」[2]の場合、一般には直接受身文の主語になることができないとされながら、これが可能な場合もあると指摘している（例文は杉本(1986：295)による)。

(14) a．外国機が日本の領空を飛んでいる。
　　b．日本の領空は外国機に飛ばれている。

(15) a．多くの人々がこの山道を歩いているようだ。
　　b．この山道は多くの人々に歩かれているようだ。

(16) a．飛行船が空を飛んでいる。
　　b．*空は飛行船に飛ばれている。

(17) a．山田さんが裏道を歩いている。
　　b．*裏道は山田さんに歩かれている。

(14)と(15)では、非文かどうかという個人差があるかもしれないが、(16)と(17)よりはるかによいということから、受身化との関連で、「移動補語」をみた場合、目的語と全く同じとは言えないものの、近似した性格を持っているとしている。

移動動詞の直接受身の可否については、野村(1995)でも以下のような例文をあげながら、その可能性を指摘している。

(18)やはり双六小屋の荷上げ道の一部として利用されていた打込谷もようやく沢通しに歩かれるようになり、抜戸岳の登路にされつつある。(『立山・剣・薬師岳』1972 山と渓谷社)

(19)もとより、アルプスでの冬期登攀の歴史は古く、すでに 1930 年代から幾多の大岩壁が登られていたが……1934 年にはアイガー東山稜がルイジ・カレル一行によって登られている。(『マッターホルン北壁』小西政継 1979 中公文庫)

以上見てきたように、目的語主格化、「の」の前での消去、受身化という三点において、「ヲ格＋移動動詞」構文は「ヲ格＋他動詞」構文と共通した統語的な特徴を持っているということは、ヲ格名詞句は動詞の表す動作・作用の働きが向けられる対象を示し、「ヲ格＋移動動詞」構文の他動性的な現れであるとみてとれよう。

4. 中国語の「移動動詞」と「空間・場所名詞句」における類型

「移動動詞」と「空間・場所名詞句」との関係は、形式的には日本語では「Nヲ」のほかに、「Nデ」、「Nへ」、「Nニ」、「Nマデ」、「Nカラ」といった動詞の前に格を伴う空間・場所名詞句を置いた形で表現される。これに対して、中国語では以下のような三つのタイプで表現されている。

(ⅰ)移動動詞が空間・場所名詞句の前に立つ“動賓構造”、つまり、「移動動詞＋場所目的語(“処所賓語”)」、“V＋N”で示す。

(ⅱ)移動動詞に補助動詞(“補語”)が付く“動補構造”、“VA＋N”で示す。

(ⅲ)介詞(「前置詞」)を伴った空間・場所名詞句が移動動詞の前に置かれる“介詞構造”、“PN＋V”で示す。

(ⅱ)のタイプは例えば、次のような例の場合である。

(20)一個漁工突然走過拐角児、吓了我一跳。
(一人の漁師がひょいと角を曲がってきて、驚かされた。)
(平井・成戸(1996：113))

「走」(歩く)は、移動動作を様態という観点から捉えたものである。このような動詞は、動作の方向よりはそのあり方を表わす傾向が強いと思われる。同時に、そのような移動動作を実現するために、移動が行われる場所としては、一定の広がりをもった領域でなければならない。したがって、「走路」(「道を歩く」)は可能であるが、「走拐角児」は言えないわけである。このように、ある場所を経過する動作を表わす場合には、動作のあり方に重点

を置く「走」という動詞単独では述語として用いることはできず、「-過」のような方向補語を伴わなければならないのである。

(iii)のタイプは例えば、次の(21)と(22)のような二つの場合が挙げられる。

(21)他三歩併両歩地従十字路口走到路那辺去了。
(彼はスタスタと四辻を向こう側に横切ってしまった。)
(平井・成戸(1996：107))

(22)他在門口走来走去。
(彼は玄関の前を行ったり来たりしている。)
(平井・成戸(1996：117))

(21)では、「従」という介詞により示される空間・場所名詞句は「到」により示される到達点と共起しているように、起点としての性格が強く表わされるものである。

(22)では、「在」という介詞により示される空間・場所名詞句は移動動作の行われる範囲を示しており、移動動作もその場所の範囲内において行われるのである。

三つのタイプの中で形式上日本語の「ヲ格＋移動動詞」構造、つまり「Nを＋V」という形に対応する中国語は(ｉ)の“動賓構造”(“V＋N”)であると思われる。例えば、

(23)過馬路時、可要注意車輛。
(道を渡る時には車に注意しなさい。)

「馬路」(道)は「過」(渡る)という動作の通過する場所で、「従」や「在」という介詞により空間・場所名詞句が明記される場合と違って、「渡る」という動作により表現の比重を置いたため、“V+N”という形式が選ばれるわけである。

ヤーホントフ(原著 1957、訳(1987：43))では、「前置詞なしに、動詞の後に立つ名詞は、必ずしも、すべてその動詞の目的語であるというわけではないと看做すほうが、より正しいということになろう。」としており、移動動詞のあとに、場所を示す名詞句が前置詞なしに立つことがあっても、積極的に動作の影響を受ける対象ではないため、間接目的語[3](所謂「場所目的語」、中国語では“処所賓語”と呼ばれるもの)であるとみなされている。

ヤーホントフ(同上：95-8)によると、このような場所目的語と移動動詞との結びつきの関係は以下のようなカテゴリーに分けられている。

(ａ) 場所目的語は運動の終着点を意味する。例えば、
shang shan(上山)　‘山に登る’
shang lou(上楼)　‘階上に上がる’
lai Bei jing(来北京)　‘北京へ来る’
qu Shang hai(去上海)　‘上海へ行く’

(ｂ)場所目的語は運動の出発点を意味する。例えば、
chu men(出门)　‘門から出る’
xia lou(下楼)　‘階上から下りる’
xia shan(下山)　‘山から下りる’

(ｃ)場所目的語は主語の意味する人物がそこを通ったり、それに沿って運動する場所を意味する。この目的語は運動の出発点や終着点ではなくて、いわば、中間点を示すのである。
guo he(过河)　‘川を渡る’
guo qiao(过桥)　‘橋を渡る’
guo shan(过山)　‘山を越える’
zou lu(走路)　‘道を歩く’

3.1 の「ヲ格＋移動動詞」の類型と以上で述べた内容をまとめると、次のような表になると思う。

表１　日本語の「ヲ格＋移動動詞」と中国語の移動動詞の表現形式

日本語	ヲ格＋移動動詞	「移り動く」を表わす。(「Nヲ＋V」)	様態性移動動作	例:歩く、走る、泳ぐ等
			方向性移動動作	例:行く、来る、戻る等
		「離れる」を表わす。(「Nヲ＋V」)	例：出る、発つ、離れる等	
		「通り抜ける」を表わす。(「Nヲ＋V」)	例：渡る、通る、越える等	
中国語	移動動詞と空間・場所名詞句の関係	“動賓構造”(“V+N”)	名詞句が終着点を示す	例：上+N, 来+N, 去+N
			名詞句が出発点を示す	例：出+N, 下+N
			名詞句が中間点を示す	例：過+N, 走+N
		“動補構造”(“VA+N”)	例：走-過、飛-到	
		“介詞構造”(“PN+V”)	例：従-十字路口 在-這一条路上	

5. 日本語の「ヲ格＋移動動詞」と対応する中国語の移動動詞表現

この節では、日本語の「ヲ格＋移動動詞」の三つの類型ごとに、中国語ではどのように訳されているのか、対応する中国語の移動動詞表現との対照を行い、両言語の表現形式の異同と要因を明らかにしたいと思う。言語資料については、「点と線」、「雪国」、「伊豆の踊子」、「野火」など中国語に翻訳されている文学作品から採取した 127 例の対訳用例について考察する。

5.1 移り動く動作を表す動詞

このグループの動詞はヲ格名詞句のさしだす場所の範囲の中で移動動作が行われることを表す。グループに属する17個の動詞をめぐって、その対訳用例をここにすこし挙げる。

(24)(a)三原は乗車までの八時間をもてあまし、札幌市内を歩いた。

(b)三原对于等车的八小时, 简直无法处理, 只好在札幌市内闲步。

(25)(a)再び銃を肩に、丘と野の間を歩く私の姿である。

(b) 这是我又扛起步枪在山岗和原野上行走的姿势。

(26)(a)お時さんとその男とはいっしょにホームを歩き、九州行のその特急に乗りこむのが、たしかに見えたのです。

(b)阿时正和那个男人一起走进月台,搭乘开往九州的特别快车。

(27)(a)島村が初めて駒子を知ったのも、残雪の肌に新緑の萌える山を歩いて、この温泉村へ下りて来た時のことだったし、…。

(b)岛村头一次认识驹子,是从积满残雪,抽出嫩芽的山上,走到这个温泉村来的时候。

(28)(a)その時刻は、安田は板付を発した飛行機の中だ。おそらく広島県か岡山県の上空を飛んでいるころであろう。

(b)那时刻, 安田正坐在自板付机场起飞的飞机中,恐怕刚刚飞到广岛县或冈山县的上空, ・・・。

(29)(a)午後の日は眩しかった。嵐を孕むと見えるほど晴れて輝く空は、絶えずその一角を飛ぶ、敵機の爆音に充たされていた。

(b)下午的阳光格外刺眼,晴朗的天空仿佛孕育着一场雷暴,敌机不断地飞过天空的一角,轰隆声响彻晴空。

(30)(a)電車通りからはずれて、ゆるい勾配を下ったところにその家はあった。

(b)离开电车路, 下了一道缓缓的斜坡, 就是这家人了。

(31)(a)駒子は十能を持って、器用に梯子を上って来ると、「病人の部屋からだけれど、火は綺麗だって言いますわ。」と話した。

(b)驹子拿着火铲轻巧地登上了梯子。“虽是从病人房间里拿来的,但据说火是干净的。”

(32)(a)修善寺温泉に一夜泊り、湯ヶ島温泉に二夜泊り、そして朴歯の高下駄で天城を登って来たのだった。

(b)在修善寺温泉歇了一宿,在汤岛温泉住了两夜,然后登着高齿木屐爬上了天城山。

(33)(a)街道を少し南へ行くと綺麗な橋があった。橋の欄干によりかかって、彼はまた身上話を始めた。

(b)从马路稍往南走,有一座很漂亮的桥。我们靠在桥栏杆上,他又谈起自己的身世。

(34)(a)道は或る時、岸に登り、蔓草を縦横に張りめぐらした、叢林の中を行った。

(b)路时而离开河岸,在蔓草丛生的树林中穿行。

(35)(a)陽光の中を行く私の体からは絶えず水蒸気が騰がり続けた。

(b)我在阳光下行走,水蒸气象火焰一样不断地从手上,头发上,军衣上冒了起来,使我的周身蒸气缭绕。

(36)(a)途中で少し険しいが二十町ばかり近い山越えの間道を行くか、楽な本街道を行くかと言われた時に、私は勿論近路を選んだ。

(b) ・・・是抄近路还是走平坦的大道?我当然选择了近路。

(37)(a)新しい谷が横わっていた。広い水が礫の上を流れていた。私が伝って来た細い流れは、竹林の切れ目から、早瀬となって落ち込んでいた。

(b)又一条新的山谷横卧眼前,宽宽的河水从碎石上流过。

(38)(a)我々は食べ終ると、再び道に出、月光の中を進んだ。

(b)饭后,立刻上路,在月光中前进。

(39)(a)「ええ……。」とだけ言って、私はその上に腰を下ろした。坂道を走った息切れと驚きとで、「ありがとう。」という言葉が咽にひっかかって出なかったのだ。

(b)“噢・・・”我只应了一声,就在这坐垫上坐下。由于爬坡气喘和惊慌,连”谢谢”这句话也卡在嗓子眼里说不出来了。

以上見てきたように、このグループの47例の対訳用例は中国語移動表現形式のパターン別にその内訳を見てみると、以下の表2のようになる。

表2　「移り動く」動詞に対応する中国語移動表現形式のパターン別の分布状況

“介詞構造”に訳されたもの	25例
“動補構造”に訳されたもの	15例
“動賓構造”に訳されたもの	5例
翻訳されていないもの	2例[4]

表2の結果から、日本語で「移り動く」動作を表わす

動詞（「歩く」（“走”）、「飛ぶ」（“飞”）など）が中国語に訳された際、その多くが“介詞構造”に訳されているということがわかる。例えば、(24)(25)(34)(35)(38)等。用例に示されているように、“在・トコロ+V”や“从・トコロ+V”のような“介詞構造”をとっている。

これはこのグループの動詞の語彙的な意味特徴によるところが大きいものであると思われる。冒頭に触れたように、「移り動く」動詞が表しているのは、空間・場所の範囲の中で移動動作が行われるということである。日本語の「行く」「歩く」「進む」などに対応する中国語の移動動詞“走”（“行走”“穿行”“闲步”）“前进”等はこのようにある場所の範囲内に限られた動作を表しているもので、動作が行われる場所を限定する“在”や“从”等の介詞を伴った“介詞構造”の使用が要求され、表現形式として多く現れているのだと考えられる。

5.2 離れる動作を表す動詞

このグループの動詞はヲ格名詞句で示される場所から離れていくことを表わしている。グループに属する8個の動詞をめぐって、その対訳用例は以下のような形式をとっている。

(40)(a)三原は、メモに「鎌倉に行きます」とだけ書いて、主任の机の上に置き、警視庁を出た。
(b)三原在拍纸簿上写下「去镰仓」三个字，放在科长桌上，便出了警视厅。

(41)(a)島村がむっつりしているので、……芸者といっしょに部屋を出た。
(b)岛村・・・便同艺妓一起走出房间。

(42)(a)夜半を過ぎてから私は木賃宿を出た。娘達が送って出た。
(b)夜半更深,我才离开小客店。姑娘们出来相送。

(43)(a)汽船が下田の海を出て伊豆半島の南端がうしろに消えて行くまで、私は欄干に凭れて沖の大島を一心に眺めていた。
(b)轮船出了下田海面,我全神贯注地凭栏眺望着海上的大岛,直到伊豆半岛的南端,那大岛才渐渐消失在船后。

(44)(a)私は立ち上り、谷を出て、光る野の中を、飢えながら駈けて行った。
(b)我站起身来,走出山谷,饿着肚子在阳光普照的原野上奔跑。

(45)(a)二十日の十九時十五分の急行で上野を発っています。これは《十和田》号です。
(b)「二十号乘十九点十五分的快车离开上野车站。这列火车是『十和田号』。」

(46)(a)二十二、二十三はそこに滞在して、二十四日に北海道を発ち、二十五日に帰京しています。
(b)二十二号、二十三号都在那里，二十四号离开北海道,二十五号回到东京。

(47)(a)また、安田の《まりも》乗車を証明する目撃者が一つふえた。三原は、うんざりして主任の前を離れた。
(b)安田搭乘「球藻号」列车的事,又增添了一名目击者。三原兴味索然地离开了科长。

(48)(a)重太郎は礼を言って店を離れた。
(b)重太郎道声谢,便离开了水果店。

(49)(a)三原が煙草に火をつけている間に、青年はせっかく運ばれてきたコーヒーを一口すすっただけで、女友だちをうながして席を立った。
(b)三原点燃香烟之际,青年已经把刚刚送到的咖啡一饮而尽,同女友一同起身离座。

(50)(a)その山を下りて下田街道に出ると、炭焼の煙が幾つも見えた。
(b)下了山,走到下田的市街,看见好几处冒出了烧炭的青烟。

(51)(a)秋でもこんなに寒い、そして間もなく雪に染まる峠を、なぜこの爺さんは下りないのだろうと考えていた。
(b)秋天都这么冷,过不多久白雪就将铺满山头,这位老大爷为什么不下山呢?

(52)(a)半ば朽ちた木の階段を下りると、木の間を透して落ちる陽が、地上に散り敷いていた。
(b)我走下半朽木梯,阳光透过树缝洒遍大地。

(53)(a)行く手に大きな明るみが近づき、赤土の勾配を降りると、一河のほとりに出た。
(b)距前面巨大的光亮处越来越近。我下了红土坡,来到河畔・・・・・・。

(54)(a)二日の後、私はその椰子の林を去った。
(b)两天之后,我离开了椰林。

(55)(a)飛行機は翼に赤と青の標識をつけて、軒傍の空を去りつつあった。
(b)机翼上装有红色和蓝色的标识灯,飞机从屋檐旁的上空掠过。

(56)(a)道が草原に露出しているところでは、列は道を外れて林に潜り、先でまた林に入って来る道を捉えた。
(b)路暴露在草原上的时候,队伍就离开道路潜入密林。前面又找到了密林中的路。

以上見てきたように、このグループの33例の対訳用例は中国語移動表現形式のパターン別にその内訳を見てみると、以下の表3のようになる。

表３　「離れる」動詞に対応する中国語移動表現形式のパターン別の分布状況

“介詞構造”に訳されたもの	6例
“動補構造”に訳されたもの	4例
“動賓構造”に訳されたもの	23例

表３の結果から、日本語で「離れる」動作を表わす動詞（「出る」（“出”）、「離れる」「発つ」（“离开”）など）のほとんどが“V＋トコロ”のような“動賓構造”に訳されているということが分かる。例えば、(40)(42)(43)(45)(46)(47)(48)(49)(50)等。

このグループの動詞の表すコトガラを捉える時は、話者の視点が「はなれた」という動作に置かれているのである。したがって、対応する中国語の動詞“离开”“出”“下”などに対して、トコロに表現の比重を置いた「从・トコロ＋V」などの“介詞構造”ではなく、動作により表現の比重を置いた「V＋トコロ」形式が選ばれたのである。

5.3　通り抜ける動作を表す動詞

このグループの動詞はある空間を移動動作が通過することを表わしている。グループに属する７個の動詞をめぐって、その対訳用例は以下のような形式をとっている。

(57)(a)国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。
　(b)穿过县界长长的隧道,便是雪国。

(58)(a)山で私は長らく塩を摂っていなかった。椰子の間を抜けて岸に降りた。
　(b)我在山上已经有很长时间没吃盐了。我穿过椰树,来到岸边。

(59)(a)その信号所を通るころは、もう窓はただ闇であった。
　(b)火车通过信号所时,窗外已经黑沉沉的了。

(60)(a)この岩の多い海岸を通ることが、彼の職場への近道であり、毎日の習慣であった。
　(b)海岸附近岩石很多,他为了走近路,每天都从这里路过,已经成了习惯。

(61)(a)道は燃え続ける野火の中を通っていたが、私はそれを越えて行くことが出来なかった。
　(b)路从持续燃烧的野火中通过,但我无法越过那熊熊的野火。

(62)(a)二十一日の朝、浅虫を過ぎる《十和田》といえば、安田が乗車したと主張している列車ではないか。
　(b)二十一日早晨,经过浅虫车站的火车,不正是安田自称搭乘前往的「十和田号」列车吗?

(63)(a)三原の頭をこれがかすめた。これなら、稲村氏が小樽を過ぎたころに安田を初めて見たということがわかる。
　(b)三原的脑海中掠过了这一念头。果真如此,则稻村在车过小樽车站之后才看到安田乃是顺理成章的事。

(64)(a)荻乗や梨本なぞの小さい村里を過ぎて、湯ヶ野の藁屋根が麓に見えるようになった頃、私は下田まで一緒に旅をしたいと思い切って言った。
　(b)过了荻乘、梨本等寒村小庄,山脚下汤野的草屋顶,便跳入了眼帘。我断然说出要同他们一起旅行到下田。

(65)(a)なにをしに行ったのかわからずに島村は温泉場に戻った。車がいつもの踏切を越えて鎮守の杉林の横まで来ると、……。
　(b)漫无目的地跑了一趟,岛村又回到了温泉浴场。车子驶过那个岔口,一直开到了守护神的杉林边上・・・。

(66)(a)あの日が修善寺で今夜が湯ヶ島なら、明日は天城を南に越えて湯ヶ野温泉へ行くのだろう。
　(b)他们白天在修善寺,今天晚上来到了汤岛,明天可能越过天城岭南行去汤野温泉。

(67)(a)湯ヶ野までは河津川の渓谷に沿うて三里余りの下りだった。峠を越えてからは、山や空の色までが南国らしく感じられた。
　(b)到汤野,要沿着河津川的山涧下行十多公里。翻过山岭,连山峦和苍穹的色彩也是一派南国的风光。

(68)(a)私達は街道から石ころ路や石段を一町ばかり下りて、小川のほとりにある共同湯の横の橋を渡った。
　(b)我们从大街往下走过百米长的碎石路和石台阶,渡过小河边公共浴场旁的一座桥。

(69)(a)それから毎日、倒木を渡ってこの斜面に坐り、海を眺めるのが私の日課となった。
　(b)后来我每天都跨过倒下的树木,坐在斜坡上,眺望大海。

(70)(a)私は目を覚ました。ブンブンという唸るような音が耳にあった。夜空を渡る飛行機の爆音であった。
　(b)我从梦中醒来。耳边响起了隆隆的轰鸣,这是飞过夜空的飞机发动机的声音。

(71)(a)刈り取られた玉蜀黍の切株の固い畦を渡って、そういう兵等のかたまっているところに辿りつくと、黙って腰を下し、水筒の水を飲んだ。
　(b)我疲惫不堪,穿过留有坚硬的玉米秸茬的农田,好容易才来到了”静坐者”群居的地方,我一声不响地坐下去,对着水壶痛饮一番。

(72)(a)主任は先に立って歩き、車の流れる電車通りを横切って、お濠端にたたずんだ。
(b)科长走在前面,穿过车如流水的电车道,来到皇城濠边。
(73)(a)私は足早に砂利を踏んで河原を横切り、前方の林の入口でもとの道に入った。
(b)我脚踩砂砾,快步穿过河滩,在前方树林的入口处踏上原路。

以上見てきたように、このグループの47例の対訳用例は中国語移動表現形式のパターン別にその内訳を見てみると、以下の表4のようになる。

表4　「通り抜ける」動詞に対応する中国語移動表現形式のパターン別の分布状況

“介詞構造”に訳されたもの	7例
“動補構造”に訳されたもの	28例
“動賓構造”に訳されたもの	11例
翻訳されていないもの	1例[5]

表4の結果から、日本語で「通り抜ける」動作を表わす動詞（「渡る」（“渡过”）、「抜ける」（“穿过”）、「横切る」（“穿过”）、「越える」（“越过”））の多くが「-过」という経過点を示す方向補語を伴う“動補構造”に訳されているということが分かる。例えば、(57)(65)(66)(67)(68)(69)(70)(72)等。

このグループの動詞の表しているのは空間・場所を移動動作が通過することである。対応する中国語の動詞“越”“渡”“穿”いずれも動作の方向よりはそのあり方に比重を置いた内容を表すため、単独では移動動作を表すのに不十分である。用例が示しているように、“-过”等のような方向補語を伴ってはじめて方向をも含めた移動動作を表す成分として完成するのである。平井・成戸(1996：110)に指摘されているように、中国語では、「トコロを経過する動作を表わす場合に用いられる動詞は方向補語を伴う必要があるか、もしくは伴った方がより完成された表現となる」のである。

5.4　まとめ

以上、5.1、5.2、5.3で述べたことを次のようにまとめられると思う。

(イ)日本語の「ヲ格＋移動動詞」（「N ヲ+V」）構造は一様に中国語の“動賓構造”（“V+N”）に対応するのではなく、“介詞構造”（“PN+V”）と“動補構造”（“VA+N”）に訳された場合が多く見られた。対訳用例の分布を見てみると、以下のようになっている。

表5　日本語の「ヲ格＋移動動詞」に対応する中国語移動表現形式の分布状況

“介詞構造”に訳されたもの	38例
“動補構造”に訳されたもの	47例
“動賓構造”に訳されたもの	39例
翻訳されていないもの	3例

(ロ)日本語の「ヲ格＋移動動詞」が中国語に訳された際、「移り動く」動作を表す動詞の多くが“介詞構造”、「離れる」動作を表す動詞のほとんどが“動賓構造”、「通り抜ける」動作を表す動詞の多くが“動補構造”に訳されているという結果が分かった。

以上のような観察の結果から、日本語と中国語の移動表現に見られたこのようなずれをどのように捉えればよいのだろうか。

まず、空間・場所名詞句の捉え方の違いである。空間・場所名詞句をヲ格という形で示す日本語と違って、中国語では前置詞を伴うか、方向補語を介して動詞のあとに置かれるという形式でもって表現されている。これは中国語において、表現全体が動作により比重を置いたため、空間・場所を日本語のように、話者の視界全体を占める一定の広がりを持った領域ではなく、4.にも述べたように、運動の行われる場所を「出発点」「通過点」など、話者の視界の一部分として、いわば点に近いものと捉えられていると思われる。

次は移動動詞と空間・場所名詞句の関係についての違いである。日本語の「ヲ格＋移動動詞」構造の多くが“介詞構造”や“動補構造”に訳されたことは、つまり、中国語において、場所を示す名詞句が3.2で考察した空間・場所を示すヲ格名詞句のように動作が成立するために必要な成分としてではなく、動詞述語の連用修飾成分として用いられるのだと考えられる。“動賓構造”のように、場所名詞句が前置詞なしに移動動詞のあとに立つとしても、他動詞のとるような動作の影響を受ける対象としてはみなされないのである。

6. 結論

日本語の「ヲ格＋移動動詞」構造の他動性及び「ヲ格＋移動動詞」に対応する中国語の表現形式を考察してきた。その結果、他動詞構文と共通する統語的特徴を持つことから、空間・場所を示すヲ格名詞句は動作が成り立つために必要な成分で、移動動作の向けられる対象として認知されているのだということを明らかにした。

さらに、対応する中国語の移動動詞表現と対照することによって、次のような点が明らかになった。

Ⅰ.中国語では移動の場所としての＜トコロ＞という概念が行為の対象としての＜モノ＞の概念とを対立的な要因として捉えられているのに対して、日本語ではともにヲ格をとるというように、共通的な概念として受けとられている。

Ⅱ.Ⅰの日中における移動の事柄に対する事態認識の違いから言語化レベルでは日本語の「Nヲ＋V」に対して、中国語では“V＋N”，“PN＋V”，“VA＋N”という三つのタイプで表現されている。

以上のことから、中国人日本語学習者に「ヲ格＋移動動詞」の用法を指導する時は、両言語の「移動」に対する事態認識の相違に着眼し、日本語の特徴を理解させると同時に、中国語と違って、移動動詞を他動詞と二項対立的なものとしてではなく、共通した概念として捉えるようにしっかりと認識を持ってもらえば、他動詞用法との混乱を避けられ、はじめに述べたような習得の困難性も解消できるのではないかと思う。

注

1) この分類の方法は奥田(1983：141)に従っている。(ⅰ)の動詞を方向性と様態という二つの観点からとらえられるのは、この種の分類はかざられになるあわせ動詞のつくり方にかかわるとしている。方向性の動詞と様態の動詞とはくみあわさって、あわせ動詞をつくることが多いのである。例えば、「歩いていく」「飛んでいく」「走ってくる」のような場合である。

2) 杉本(1986：282)では、「を」に関する問題を取り上げた中で、「太郎は次郎をなぐった」のような場合のヲ格名詞句を「目的語」、「太郎は遊歩道を歩いた」のようなヲ格名詞句を「移動補語」と呼ぶことにしている。

3) C. E. ヤーホントフ(訳 1987：43-7)によると，動詞の後に来るばかりでなく，前置詞の ba(把)をとって動詞の前に来ることもできる目的語を直接目的語としている。一方，直接目的語の外に，間接目的語が３型あって，直接目的語と同じように，前置詞なしに動詞の後におかれるが，直接目的語とは違って，ba(把)構文をなさない。３型のうち，場所の意味を表わす間接目的語がある。この種の間接目的語は，通常，前置詞を持たないところの場所の連用修飾語と自由に交替することができる。

4) 「移り動く」動詞に対応する中国語表現では、「ヲ格＋移動動詞」が翻訳されていないものは２例あった。

(1)(a)私は伍長達に追いつこうとして足を速めたが、私の脚では、すぐ前を行く兵を、追い抜くことも出来なかった。

(b)我一心追赶伍长他们，加快了脚步，但是凭我这双脚不可能马上赶过前面的士兵。

(2)(a)月が村に照っていた。犬の声が起り、寄り合い、重なり合って、私が歩むにつれ、家々の不明の裏手から裏手を伝って、移動した。

(b)月光照耀着村庄,狗群又叫了起来,叫声汇合在一起,响成了一片,叫声随着我的脚步,在屋后的暗处移动着。

このように、日本語では「行く」「伝う」のほかに、同じような移動の意味を表わす動詞「追い抜く」「移動する」などが併せて用いられる場合、中国語表現としては述語として表れる後者の方のみが翻訳され、修飾語として表れる「ヲ格＋移動動詞」は翻訳されないでいるのである。

5) 「通り抜ける」動詞に対応する中国語表現では、「ヲ格＋移動動詞」が翻訳されていないものは１例あった。

(a)船は見えなかったが、音は岬の蔭から、平らな海と野に反射し、空を渡って、真正面に吹きつけて来た。

(b)海面上响起断断续续的马达声,见不到船的影子,马达声通过平静的海面和原野的反射,从海角后传过来。

この対訳用例も注 4)と同じように、「渡る」のほかに、「吹きつけて来た」のような移動の意味を帯びる表現が用い合わせられるため、同じ移動を表わす表現については、中国語では述語動詞の方のみ翻訳されている。

参考文献

荒川清秀(1984)「中国語の場所語・場所表現」『愛知大学外国語研究室報』第８号．Pp. 1-14

———(1996)「日本語と中国語の移動動詞」『外語研紀要』第22号．愛知大学外国語研究室．Pp. 9-23

朴　垠貞(1998)「移動動詞構文における他動性の問題」『ニダバ(NIDABA)』27. 西日本言語学会. Pp. 38-46

C. E. ヤーホントフ(1957)『中国語動詞の研究』橋本萬太郎 1987 訳．白帝社

福島直恭(1988)「「病室を移る」と「病室を移す」―名詞の意味と文法的現象―」『静修短期大学研究紀要』19. Pp. 61-67

言語学研究会編(1983)『日本語文法・連語論(資料編)』奥田靖雄「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」むぎ書房．Pp. 21-149

後藤克己(1964)「「本を読む」と「道を歩く」」『国文学攷』35-11 広島大学国語国文学会. Pp. 52-58
平井勝利・成戸浩嗣(1996)「移動動作の場所を示す“从”と補語をうける“ヲ”の日中対照」『言語文化論集』第17巻第2号. 名古屋大学言語文化部. Pp. 107-123
方　美麗(2002)「「連語論」＜「移動動詞」と「空間名詞」との関係＞―中国語の視点から―」『日本語科学』11. Pp. 55-77
池上嘉彦(1993)「＜移動＞のスキーマと＜行為＞のスキーマ―日本語の「ヲ格＋移動動詞」構造の類型論的考察」『東京大学教養学部外国語科紀要』41巻3号. Pp. 34-53
黒田史彦(2000)「移動動詞と共起するヲ格名詞句について」『FONS　LINGUAE　関西外国語大学大学院研究論集』14. Pp. 53-69
孟　慶海(1986)「動詞＋処所賓語」『中国語文』第4期. Pp. 261-266
野村剛史(1982)「自動・他動・受身動詞について」『日本語・日本文化』11. 大阪外国語大学留学生別科・日本語学科.『動詞の自他』所収, 1995, Pp. 137-150
岡崎智己・張建華(1998)「中国語話者の日本語学習時における自動詞・他動詞の使用に関する分析」『九州大学留学生センター紀要』第9号. Pp. 19-38
奥津敬一郎(1967)「自動詞化・他動詞化および両極化転形」『国語学』70.『動詞の自他』所収, 1995, Pp. 57-81
須賀一好(1981)「自他違い―自動詞と目的語, そして自他の分類」『馬淵和夫博士退官記念　国語学論集』,『動詞の自他』所収, 1995, Pp. 122-136
杉本武(1986)　『いわゆる日本語助詞の研究』第三章「格助詞」　にほんごの凡人社. Pp. 281-318
寺村秀夫(1982)　『日本語のシンタクスと意味』(第Ⅰ巻) くろしお出版
ウェスリー・M・ヤコブセン(1989)「他動性とプロトタイプ論」『日本語学の新展開』くろしお出版. Pp. 213-248
山梨正明(1995)　『認知文法論』ひつじ書房
姚　艶玲(2003)「日本語における「ヲ格＋移動動詞」と「空間・場所名詞句」との結びつき関係」『比較社会文化研究』第14号. Pp. 63-72
朱　徳熙 (1982)『語法講義』商務印書館

用例出典

【日本語】

『CD－ROM版新潮文庫の100冊』新潮社版

【中国語】

晏洲　訳『点与線』　天地叢書　天地図書有限公司
叶渭渠　訳「雪国」『川端康成文集』中国社会科学出版社
「伊豆的舞女」『川端康成文集』中国社会科学出版社
王杞元 金强　訳『野火』昆仑出版社